
とある世界の主人公達

K・W

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある世界の主人公達

【Nコード】

N94520

【作者名】

K・W

【あらすじ】

とある魔術の禁書目録の原作22巻以降のif談

第三次世界大戦が終わった後の世界

第一部（前書き）

とある世界の主人公達^{ヒーローズ}

原作22巻以降のif談です。

原作見てない人はネタバレありますので注意。
小説初めてなのでご容赦下さい。

第一部

一つの戦争が終わった

一方通行、打ち止め、番外個体はロシアのとあるホテルの一室にいた。

学園都市の回収部隊を撃退しここに至る。

そこへ

「ひゃっほーい。元気にしてるかにゃー」

その一室に飛び込んできたのは

金髪にサングラスかけた男

土御門元春だ。

「てめエがなんでこんなところにいやがるんだア、おおい」

一方通行は忌々しそうに告げる。

「回収だ。お前らはオレと一緒に学園都市に帰るんだにゃー」

それに、と土御門は続ける。

「学園都市は今焦っている。アレイスターのメインプランであるお前も上条当麻も、戦争が終わったにも関わらず学園都市に帰ってき

てないんだからな。反撃するなら今しかないんだにやー」

一方通行は眉をしかめる

当然だ。学園都市第一位の自分以外にもメインプランが存在するのだという。

しかもその名前はかつて学園都市最強を2回も倒した男。

「あの三下は一体何者だア？ロシアにもいたけどよオ」

土御門はニヤリと笑い

「あの右手は幻想殺しと呼ばれている。右手に限りあらゆる異能の力を打ち消す能力だにやー。ちなみに戦争の首謀者を倒したのも上条当麻ぜよ？まあ今は行方不明なだけだな」

一瞬寂しそうな顔をした土御門だったが真面目な顔つきに戻る。

「お前も魔術師ってやつを知ってるな。0930事件もアビニョンの暴動もイギリスのクーデターも第三次世界大戦も魔術師によって始まった事ぜよ」

一方通行は今は眠っている打ち止めと番外個体に一瞬目線をやり、土御門の方に目線を戻す。

「そしてその事件の全てに上条当麻が関わっている。まあ上やんにについてはこれぐらいでいいか」

一方通行もそれ以上は興味がならしく次の話題に移す。

「で、反撃ってのは具体的にどオするつもりだア、窓のないビルでもブッ壊すつもりかア？」

土御門はニヤリと笑い

「別にオレたちは戦争を起こすつもりじゃないんだにゃー、戦争を起こせるっていう勢力を作ることが大事なんだにゃー」

つまり、と土御門は告げ

「学園都市そのものを壊すわけではなく、学園都市を裏で操ってるやつらから学園都市を解放するってことぜよ」

「ギャハハハハハ、いいね、いいねエ、面白エよ、汚ねエゴミ掃除は『グループ』の時から変わってねエよなア」

土御門は説明を続ける。

第一部第二話

「あー、あとたまたまロシアに上条当麻以外で学園都市の学生ながらも戦争に参加した者がいるんだにゃー」

一方通行には心あたりがあつた。『グループ』の仕事で、そしてエリザリーナ共和国で再び出会った一人の少年と一人の少女だ。

「お前らを回収する前に先に回収しといたぜよ、あいつらにはもう話はしてきたにゃー。今から呼んでくるからちよつと待ってるんだにゃー」

そう言つて土御門元春は部屋から出て行つた。

「てめエらいつまで寝たフリしてやがる」

その声と共に二人の少女が目を開いた。

そして

「反撃開始だね、とミサカはミサカは高ぶる感情と貴方には戦つて欲しくない気持ちを混同させながら言つてみたり！」

「面白くなつてくる展開にミサカ色んな悪さを思いついちゃう」

一方通行は呆れ気味に

「てめエらは戦略外だボケ、病み上がりで包帯まみれがハシヤイでんじゃねエ」

そう、一方通行は彼女たちを戦わせる気はない。
学園都市にとって彼女たちは驚異でもなんでもないのだから。

第一部第三話

神裂火織はイギリスにいた。上条当麻搜索部隊に加わろうとしたが第一線で働いていた神裂火織を含む新生天草式、アニメーゼ部隊は傷を負っていて足手まといになりかねないということで他の部隊に任せたのだ。もちろん聖人である神裂はまだ動けるのだが。天草式の皆を置いて一人だけで行くという考えは今の神裂火織にはない。

「まだあの少年は見つからないのですか」

教会世界には何の関係もないとある少年を思い浮かべる。

そこで神裂火織の携帯電話が鳴り出す。

土御門元春がホテルの一室から出た後に電話をかけたのだ。

「はい、神裂です」

平静を装ってるが神裂の声には生気がない。

当然だ。先日まで戦争の第一線で戦い、戦争を終結させたとある少年は未だ行方不明なのだから。

「なんの用ですか？貴方がこちらにも顔を出さず裏でコソコソ何をやってるかは知りませんがこちらにも忙しいので手短にお願いします」

神裂は土御門の電話を鬱陶しそうに答える。

「ってことは上やんはまだ行方不明か」

そんなことよりと土御門は告げ、

「ねーちゃん、オレと取引しないかにゃー」

神裂火織は驚愕する

「！！！！んっ！！なっ！！ふざけているなら切りますよ！！！！」

「ふざけてなんかないぜよ。この携帯電話も盗聴されないように施してあるし通話記録も残らない、それにこの取引はねーちゃんが恩を感じている上やん絡みだぜい」

神裂火織は理解ができない。上条当麻は行方不明だ。その上条当麻絡みというのが理解できないのだ。

「あなたは上条当麻の現状についてなにか知っているのですか？！」

学園都市や『必要悪の教会』の裏でコソコソ動き回っている彼ならあの少年について何か知っているかも知れないと思ったのだ。

しかし、

「にゃー、上やんについては何も知らないにゃー」

簡単に否定された。

「でもこれだけは分かる。イギリス清教は学園都市と戦争をしようとしている。その戦争を止めるには上やんが必要ってことも上やんは必ず戻って来るってことも」

神裂火織は耳を疑った。

「イギリス清教と学園都市が…戦争？」

「ああ、学園都市統括理事長の正体はエドワード・アレクサンダー
又の名をクロウリー」

「その意味が分からんねーちゃんじゃねえだろ、アレイスターは上や
んに命を救われたフィアンマを殺しに『外』にでてきた」神裂火織
は頭が混乱し、手を額につける。

「おそらく『外』に出てきた時に魔力が感知されたのだろう。まあ
フィアンマは生きていたらしいがな、わざと生かしたのかフィアン
マの実力なのかは分からんがにゃー」

「それで取引というのはなんでしょう？」

神裂の言葉に真剣味が増す。

「オレたちは戦争を止めたい。こんな下らないことに関係のない学
園都市の住人やイギリス人が巻き込まれるのは間違っている。それ
は第三次世界大戦にしてもそうだった。だからオレたちは繰り返し
ちやいけない」

神裂は土御門の言葉に賛同する。

「それで私はどうすればいいのですか？」

「ねーちゃんは天草式とアニエーゼ部隊を連れて聖ジョージ大聖堂に
向かって欲しいにゃー、そこで禁書目録とスタイルと合流し学園都
市へ来て欲しい」

「しかし、イギリスからどうやって学園都市へ!？」

神裂が驚くのも無理はない。聖ジョージ大聖堂からインデックスを救い出すのも厳しいのにそれから空港へ行き学園都市へ向かうまでにどれほどの追手がくるか分からない。

「その辺は心配しなくても大丈夫だにや、オレも今はロシアにいるし学園都市へ行くついでにそっちを拾っていく。学園都市に入ったら多少戦闘になるかもしれないが一旦落ち着いたら奴らも兵器の無駄遣いはしてこないぜよ」

彼は本当に無茶苦茶な事を頼んでくる、と神裂は口元を緩めた。

「それで学園都市へ行ったとして私たちはどうするのですか？」

そう。問題なのはそこなのだ。どれだけ天草式やアニーゼ部隊が人数が多くて聖人が一人入っていようとその程度なのだ。

学園都市やイギリス清教からすればそんな戦力はちつぽけすぎる。

「取引するんだよ。詳しいことはまだ言えないがさっき言った通りオレたちは戦争を止めたために動いてる。信じてくれると助かる。もしオレたちに手伝えないというならそれでも構わない。どうする？ 神裂火織」

しばらく沈黙が続いた

だが神裂の心はすでに決まっていた。

「土御門、私の魔法名を忘れましたか？」

土御門はほっとした表情になる。

「感謝するぜよ、ねーちん。じゃあ聖ジョージ大聖堂に着いたら連絡してくれ」

「分かりました。それでは」

神裂火織は電話を切る。

（さあ、やるべきことは山積みです。部隊の説得にステイルとインデックスと合流、そして…）

一人の聖人が動き出す。

とある少年の生存を信じて。とある少年が望む誰もが笑って誰もが犠牲にならないハッピーエンドを信じて。

電話を切った土御門は一人呟く。

「さーて、こんなにうまくいくかにゃー」

そしてホテルのラウンジに辿り着く。

学園都市最強のレベル5第4位とレベル5の8人目候補、そして

レベル0だが愛する者のためならばヒーローになれる少年がそこにいた。

第一部第四話

一方通行、打ち止め、番外個体、浜面仕上、滝壺理后、麦野沈利、土御門元春の七人は一方通行達が泊まるホテルの一室に集まった。

二人がけのソファァーがテーブル越しに二つあり、そこに土御門と麦野、浜面と滝壺が座り、打ち止めと番外個体はそれぞれのベッドに腰掛け、一方通行は壁にもたれている。

「まあそれぞれ面識はあると思うがとりあえず紹介と状況説明しくぜい」

土御門が口を開き、説明を始める。

それぞれの能力のこと、『妹達』のこと、『第三次製造計画』のこと、暗部間抗争はあらかじめ仕組まれていたものだったということ、パラメータリスト『素養格付』のこと、学園都市以外の超能力以外に『魔術』という異能の力があり、それを使う『魔術師』が世界には存在し、自分もその中の一人だということ、第三次世界大戦がその『魔術師』によって引き起こされたということ、そして第三次世界大戦の首謀者を『上条当麻』が倒したこと、また行方不明だということ。

一時間以上の説明にも関わらず、話を聞いている者は土御門の話が終わるまで誰も口を開かなかった。

土御門の説明が終わる。

打ち止めは退屈すぎたのかベッドでそのまま寝てしまっている。

緊張に耐えられなかったのか浜面が口を開く。

「オレ達『アイテム』しか知らないはずの情報をなんで知ってんだよ、クソっ！」

「オレは多角スパイだからな。いろんな組織と接触し、もちろんその組織の『裏』も見てる。つっても『素養格付』についてはかなり最近に知ったから安心するにゃー」

「『素養格付』だの『魔術師』だとそんなンはどオだっていい。それでオレたちはこれからどオするつもりだア」

「私も第一位の意見に賛成よ。ここに滞在していてもいつ学園都市の部隊が来るかわからない」

「一方通行や麦野が『魔術師』や学園都市の『闇』について興味ないのを察してか土御門は再び説明に入る。

「まずオレ達は今からイギリスに向かう。そこで魔術師と合流し、学園都市へ向かう。方法についてはオレが乗ってきた超音速旅客機で行く」

「おい、ちょっと待て。なんでそこで魔術師とかいうやつが出てくる。これは学園都市の問題だろオが」

「あー、悪い。説明不足だったにゃー。」

そこで土御門は、アレイスターの正体が魔術師だということやそれがイギリス清教という組織にバレて学園都市とイギリスが戦争を起こそうとしてることを説明する。

「この作戦は学園都市を『闇』から解放するのと、その戦争を事前

に食い止めるのも兼ねてるんだにゃー。それで後者の目的の関係で魔術師たちにはこっちの手伝いもしてもらおう。逆も然りだ」

さらに土御門は続ける。

「それにお前達のためにもこの作戦は必要なんだ。お前達だってこれから学園都市から逃げながら生活続けるなんてできないはずだし、学園都市に帰ったとしても何かしらの弱みを握られて利用されるのがオチだ」

しばらく沈黙が続いた。

それぞれ納得する部分があるのだろう。

「これから合流する魔術師については心配いらない。また戦争が始まり、それによって関係ない人が犠牲になるのが見てられない連中だ。説明はとりあえずこれぐらいでいいだろう。作戦についても随時教える。まだメンバーについても一握りだからな」

（クソっ！結局こいつの言う通りにするのが最善策ってことかよ。何があってもオレは滝壺と麦野を守るぞ。）

「おい、行くぞクソガキ！置いてくぞ！」

「んー、退屈な作戦会議は終わったのって、ミサカはミサカは貴方を追いかけながら聞いてみたり」

「ああ、今からイギリスだア」

そして七人はホテルの一室から出る。

土御門が用意しておいた超音速旅客機に乗り、イギリスへと。

行間一

とある少女の父親は世界最悪の魔術師と呼ばれる悪人だった。

父親のせいで家族は命を狙われ、バラバラになり、親戚も友人も家族も死んでしまった。

大好きだった母でさえ。

少女は奇跡的に命は助かり、身分を隠し、教会に身を置くことができた。

そして少女は決意した。

少女は目的の為に努力する。

父や母が使っていた魔術を勉強し、それを極めようとした。

目的の為に何でも利用する。何にでも利用される。

目的の為にどんな『自分』にもなる。どんなに嫌なことでも笑ってやる。

少女は成長した。

もしかしたら父親の影響で自分にも才能はあるのかもしれないとさえ思った。

だがそんな忌々しいものでも受け入れ、力にした。

少女は魔術だけでなく、『会話術』『交渉術』といった、いろいろな分野も力にしていた。

人の感情がどういうものかも、きっと理解しているかもしれない。

そんな『力』を持った少女には、いつしか組織の中で並び立つ者すらいなくなってしまうた。

そして少女はこう呼ばれるようになった。

『アークヒショップ
最大主教』と。

第一部第五話

浜面仕上は超音速旅客機の中で困惑していた。

第三次世界大戦が終わったと思ったら、金髪サングラスのムキムキボディ（麦野曰く『グループ』のリーダー）の巧みな話術と作戦に乗せられついてきたら、学園都市最強のレベル5や第三位の軍用クローンと合流し、さらに他の仲間と合流するといっについてきてみたら日本刀ぶらさげたふざけた格好のお姉さん風の女性や銀髪碧眼のシスター（感情がなくなるぐらい落ち込んでる？）や煙草をくわえた長身赤髪神父に さらに、黒い修道服を着た200ぐらいいるであろうシスター軍団までいる。

（まったく一体『グループ』のリーダーって何者なんだ。同じ『グループ』の第一位ならわかるがこのオカルト要素満載の連中はなんなんだよ。）

「浜面、大丈夫。この人達はきっと悪い人達じゃない。」

落ち着かない様子の浜面に滝壺が声をかける。

「どうだろうね、なんだか都合よく利用されてると思うんだけど。まあそれならこっちもそのつもりでいればいいし」

とりあえず麦野はこの連中と仲良くするつもりはないらしい。

浜面もそんなつもりはないわけだが、なぜかこの集団の空気は心地

よかった。

ステイル・マグヌスはインデックスと呼ばれる少女に寄り添っていた。

第三次世界大戦以来、常に上の空のような感じで、元気はなく、食欲すらないようだった。

本来の彼女を知る者なら『異常』と感ずることができだろう。

それだけ彼女は心にダメージを負っていた。

とある少年の『死』に。

（上条当麻、この子をこんな顔にさせるとはどういうつもりだ。世界を救ったところで彼女を笑顔にできないならなんの意味もないじゃないか）

しかしステイルは今のこの状況の方が理解できなかった。

突然神裂から連絡が入り、上条当麻に関わることらしいのでとりあえず言われた通りを試みたら、神裂率いる天草式やアニメーゼ部隊が現れこの子の脱出手伝いさせられ、おまけに学園都市の能力者共と合流し、今は学園都市に向かっているのだというのだから。

そもそもいくら神裂や天草式、アニメーゼ部隊が有能だからといっても簡単に抜け出せすぎなのだ。

それに追手がくる様子もない。

10万3000冊に比べれば神裂火織や天草式、アニメーゼ部隊などちっぽけなものにしかないはずなのに。

（何を考えている、最大主教。まだそちらには遠隔制御霊装があるという余裕か）

一方通行は土御門元春の隣に座っていた。

打ち止めの隣には番外個体が座り、仲良しには見えないがそれほど仲が悪そうにも見えない。

まあうまくやってるに越したことはねえ、と一方通行は考えていた。

そこへ一方通行は土御門に質問する。

「あの三下は本当に行方不明なんだろオナ。

第三次世界大戦には『超電磁砲^{レールガン}』も参加してたらしいなア、そつちの回収はいいのかよ」

土御門は真面目な顔つきで返答する

「『超電磁砲』については問題ない。別ルートで学園都市に向かっている。上やんについてはなんとも言えないにやー。あらゆる予測は立てられるけど、裏付けるものはなにもない。だがあの『幻想殺し』は簡単には死なないぜよ。あいつ自身もそうだし、わざわざあいつ

を『外』から呼び出し、メインプランにまでしたアレイスターがそう簡単に死なすわけない」

土御門は寂しそうに笑い。

「オレはただ友達が死んだのを認めたくないだけなのかもれないがな」

一方通行はなにも言わない。

「ただ上やんなら生きてる気がするんだよ。だからあいつがいない間あいつの世界を守るのも友達として当たり前なんだ。奴等に壊させるつもりはない」

第一部第六話

一方通行は土御門の話を何も言わずに聞いていた。

「アレイスターがなにを考え、今オレたちという魔術師のトップ、イギリスって組織の『最大主教』って奴いるんだが、奴もアレイスターと同じで何を考えているかわからない。敵は多いし、強大だにやー。だがそれはオレたちが逃げて、そいつらに従い続ける理由にはならない。お前も最後まで戦ってくれると嬉しいにやー、まあ強制力はないからお前はお前のしたいようにすればいいんだけど」

一方通行は呆れたように呟く。

「今更そんなこと確かめる必要もねえだろオが」

「でもあいつらは信用できんのかア？魔術師とかいう連中は、やつらも組織に属してんだろオが」

土御門はかつて親友に話した言葉を思い出しながら言う。

「魔術師ってのプロって言っても特殊部隊とか軍隊みたいなプロじゃないんだ。むしろ戦闘に関しちゃう素人だぜい」

なに？ と一方通行は怪訝な顔をする。

「これは上やんにも話したんだけどな、魔術師ってのはその魔術を使い、学園都市の最新兵器だって平然と壊せるかもしれない」

でもな、 と土御門は続ける。

「それは何の力も持たない子供に銃を持たせることと変わらないにやー。だから敵の言葉に耳を傾けるし、殺すべき敵と上に命令されても見逃したり、その敵と手を取り合うことだってあるかもしれない」

一方通行は一つのこと気づく。

「超能力者も魔術師もたいして変わんねエってことか」

結局はそういうことだった。この魔術師たちもそれぞれ『闇』を抱え、それに抗うために魔術という力をつけたということだ。もちろん生まれつきの才能や努力の違いで力の差はあるかもしれない。だがそれは学園都市の学生と違いはあるか？

「奴らにとって『組織に属する』ということは特に意味はないんだにやー。たまたま自分の目的が一緒だからそこにいるだけだぜい。オレたちにしたってそれは何も変わらない」

土御門は一方通行に優しく微笑みかけ、

「そろそろ学園都市だ。とりあえず病院に向かうぞ。お前のよく知ってる医者がいるところだ。番外個体も怪我してるし、着いた後の戦闘で誰が傷つくかわからない。病院の方にも手回しはしとくから安心するといいにやー。一般人を巻き込むわけには行かないしな」

この男がこの中の誰よりも行動力があるんじゃないかと思う一方通行だった。

第一部第七話

少女とその妹は、少女の父親と一緒にいた。

少女は、かつて命を救ってもらった少年を救うことができず、久しぶりの父親の顔を見ても笑顔を見せることはできなかった。

父親は、少女の背負ってるものを何も聞かず、

学園都市へ帰ろう、とだけ告げ、

少女は、妹に身を借りることでもかろうじて、父親の後ろを歩くことができ、妹も何も言わなかった。

なぜ父親がここにくることができたかなんてわからなかったが、そんなことを考えることができなかった。

少女が考えているのは一つだけ。

かつて自分の命を救い、妹の命を救い、後輩の命を救ってくれた少年のことだけ。

考えてみれば、いつも少年とくっついていた白いシスターも少年のことを命の恩人だと言っていた。

少年はたくさんの命を救ってきたはずなのに。

この戦争にしたってあの少年はきつとたくさんの命を救ったはずなのに。

「…。なんで。」

少年とお揃いの、少年が持っていたはずのストラップを握りしめる。

「…なんで。」

みんなが救われて、あの少年だけ救われないなんて間違ってる。

「…なんで。」

少年が乗っていた空飛ぶ建物はボロボロになって、今では残骸しか残っていなかった。

あの飛距離から落ちて、人間が生きていられるわけがない。

いくら少年がどんな困難にも、どんな強敵と戦って今まで生きてこれたからといっても、彼は『人間』なのだ。

生死など一目瞭然だ。

しかし、

少女も希望を捨てたくなかった。

いや、まだ捨ててないかもしれない。

あの少年なら、

あの少年なら、

必ず、

誰もが犠牲にならない、誰もが笑い合えるハッピーエンドを作ってきた、

あの少年なら、

だが、

少女の涙は止まらなかった。

少女は少年と話したいことが山ほどあった。

一端覧祭のこと。

少年の抱えている問題のこと。

自分が少年に対して思ってること。

もう聞けないかもしれない。

「…やだ。」

もう少年に会うことすらできなくなってしまうかもしれない。

「…やだよ。」

最近少年のことばかり考えていた。

一人でモヤモヤしてるのが嫌で、少年に会いにきて。

思えば、少年と初めて出会った時から少年のことを考える時間は多かった気がする。

もちろん今みたいな感情ではないが、無能力者の少年が第三位の自分を負かしたのが気に入らなくて、街であの少年を探すことが日課みたいになっていた。

自分は少年のことを追いかけてばかりだった。

そのくせあの少年は、ピンチの時にはいつも助けに来てくれた。

頼んでもないのに。

いつも自分が追いかけてばかりなのに。

普段会つと不幸だ、と言って逃げてしまুকせに。

本当にあの少年はズルいと思う。

少年のことを思い出していたら涙は止まっていた。

少年はどこにいるか分からない。

生きているのかも分からない。

死んでいるかもしれない。

でも、

それでも、

少女は諦めない。

きっと少年が逆の立場だったら絶対に諦めず、最後の最後まで戦うはずだ。

少年との思い出が教えてくれる。

自分は少年のように強くないけど、

抗う権利ぐらいある。

少女の目に魂が宿る。

「父さん、妹、ごめん。私、どうかしてた。まだあいつが死んだわけじゃない。まだ私は戦える！」

力強い少女の声に妹も答える。

「元気をだしてくれて安心しました、とミサカもお姉様と同じく元気いっぱいに言ってみます。」

父親も答える。

「お前達に足りないものは分かっているよ。そのためにこれからみんなで力を合わせなくちゃいけないんだ」

「どういうことですか？」とミサカは説明を求めます」

父親はニヤリと笑い、

「少年が救った世界がまた崩壊しようとしてる。そして、その崩壊を止めようとする、一つの勢力が出来上がるうとしている。その勢力と力を合わせて、再び戦争を起こそうとしてる奴らを止めるんだ」

「なに、全然わからないんだけど」

「その悪い奴らは世界を救った少年のことを知ってるんだよ」

だからな、と父親は言い、

「その勢力と力を合わせるのが、少年を救う『鍵』になるんだよ」

「その勢力ってなに？」

「なに、すぐわかるさ。かつて少年と殴り合い、共に戦い、命を救われた人達の集まりだ」

まあ利害の関係で若干関わってないメンバーもいるけどね、と父親は付け加えた。

「その勢力がどんなのか知らないけど、一緒に悪い奴らとつちめてやろうじゃないの！」

「父親としては反対なんだけどね。私の娘なら大丈夫だと信じてる

よ
「

「学園都市に到着したら合流する手筈になってる。父さんは別件があつて送つてくるところまでしかできないからな。気をつけるんだぞ！」

「うん！」

「分かりました、とミサカは覚悟を決めます」

（さあ、アレイスター。反撃の時間だ。）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9452o/>

とある世界の主人公達

2011年1月1日23時33分発行